

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2016

課題番号：25300048

研究課題名(和文) 東アフリカにおける「早すぎる高齢化」とケアの多様性をめぐる学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research on the Rapid Aging and the Variety of Care in the East Africa

研究代表者

増田 研 (MASUDA, Ken)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：20311251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は日本のアフリカ研究者による初めての高齢者研究であり、かつ、人類学と公衆衛生学・保健学を組み合わせた方法論を採用したため、期間を通じてそのアプローチのあり方について模索を続けた。成果として書籍(編著)を公刊したほか、日本アフリカ学会におけるフォーラムの開催、日本アフリカ学会の学術誌『アフリカ研究』に特集を組んだことがあげられる。検討を通じて、都市部貧困層高齢者の課題、アフリカにおける高齢者イメージの解体、生業基盤によるケアのあり方の違いといった探求課題を整理できたことも成果である。

研究成果の概要(英文)：This research project focuses on elderly life and care by exploring research methodologies and issues by inter-disciplinary approach of anthropology and public health. We held a academic forum at the conference of Japan Association for African Studies, and published books and articles. Several unexpected research topics are raised through research and discussion; 1. Elderly life in poverty in urban settings, 2. requirement of critical examination of stereotypical imagination for elderly, 3. differences of care community among subsistence economies.

研究分野：社会人類学

キーワード：アフリカ 高齢者 民族誌 老年学 社会福祉

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想の背景として、(1)アフリカにおける保健指標の改善と急激な高齢化への懸念、(2)多元的医療状況における多様な高齢者ケアの実態解明の必要性の2点を挙げることができる。

(1)アフリカにおける保健指標の改善と急激な高齢化への懸念

ミレニアム開発目標 (MDGs) への取り組みにより、アフリカにおける保健指標は著しく改善された。例えば過去10年間の乳児死亡率 (IMR) はエチオピアにおいて98‰から75‰へ、ケニアにおいては67‰から44‰へと、ともに大きく低下している。プライマリ・ケアの進展により今後アフリカにおいて感染症による死者はさらに減り、非感染症 (NCDs) による死者が増えるようになる。いわゆる疫学転換がもたらされるのだ。

衛生状態の改善や感染症による死亡率の低下が人口転換をもたらすことは広く知られている。すなわち多産多死の状態から、多産少死の時期を経て少産少死の均衡状態に帰着する。しかしながら人口転換の過程においては死亡率の低下が出生率低下に先行するため、惰性的な人口増加が継続する (人口モメンタム)。過去20年間でエチオピア、ケニア、ウガンダのいずれにおいても人口は1.7倍増加した。これは日本における戦後65年間の人口増加率とほぼ同じである。

これにともない、老年従属人口指数は今世紀後半に急激に上昇することが予想されるが、なかでもエチオピアにおける指数は2050年において現在のスリランカに、2100年において現在の日本に匹敵すると予測されている。公的年金や介護システムが整わないなかでの「早すぎる高齢化」は、それぞれの国内における政治・経済的格差、とりわけ医療や社会保障の格差を顕在化させ、社会システムそのものの不安定化をまねく恐れがある。経済のグローバル化はアフリカにおいても急激な経済発展と都市化の進展をもたらしたが、人口の都市への流入により農村部における家族ネットワークが弱体化し、高齢者を社会的に周縁化させてしまうことが懸念されている。

(2) 多元的医療状況における多様な高齢者ケアの実態解明の必要性

Cohenら(2006)はアフリカで進行する社会の高齢化に対処するために次のような調査を行う必要性を説く。すなわち変化する社会関係や家族関係における高齢者のあり方に関する統計的な調査および経験的データ収集の必要性、アフリカにおける高齢者像の多様性を認識することの必要性、現地における調査能力の向上と政策提言

へのサポートの必要性である。とりわけ文化人類学的な観点から注目すべきは、個別の地域社会における高齢者像の多様性と医療多元性である。

アフリカにおける医療は、複数の医療知識体系が併存・共存する多元的なものであり、住民の医療行動はクラインマン (Kleinman 1980) のいう民間セクター、民俗セクター、医療職業セクターの多様な組み合わせとして把握される。一方、近年の社会開発の浸透により近代医療セクターへの依存度合いが高まってきたことは事実であるが、提供されるサービスが限られている現状では、高齢者ケアの充実は期待できないのが現状である。研究代表者の増田は2008年以来、ケニア、エチオピア、ブルキナファソ、バングラデシュ、フィリピンにおいて、それぞれ感染症ケアをめぐる医療多元性の実態を調査してきたが、現時点での取り組みは感染症対策や母子保健に限定されており、広い意味での福祉 (ウェルビーイング) の実現にはさらなる課題設定が求められている。

こうしたなか、プライマリヘルスケアの取り組みとして広く導入されているのがコミュニティヘルスである。たとえばエチオピアは2004年から始まった基礎的な保健・衛生に焦点を絞った保健普及プログラムによって3万人のコミュニティ・ヘルスワーカーを育成し、村落部における保健・衛生の普及に取り組んできた。こうした取り組みは住民によるコミュニティ保健への積極的な参与を促し、また住民の健康状態を保健セクターが把握するためのサーベイランス確立の素地を形成しつつある。また同様の取り組みはケニアおよびウガンダでも活発である。こうしたシステムの構築と改善のなかに、来たるべき高齢化社会を見据えたケアの全体像を構想することは、すでに高齢化社会をむかえ困難な課題に直面している我が国の研究者の責務であろう。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、これから急激な高齢化を迎えると予想されるアフリカ社会に対して意義ある社会システムを提案するために、(1)未だ明らかになっていない高齢者ケアの実態の解明、(2)調査手法の確立、(3)スリランカおよび日本との比較を通じた政策提言の検討を行うことである。

3. 研究の方法

本研究の調査対象地はエチオピア、ケニア、ウガンダ、ザンビアの東アフリカ4ヶ国、調査地点はそれぞれ環境や生業経済の異なる7箇所である。また比較のためにスリランカ南部における調査も実施する。各々の担当者はすでに当該地域周辺における豊富な滞在経験を有しており、これまでの調査の蓄積の上に本研究の調査を開始することができる。調

査活動は3つのフェーズからなる。フェーズでは全員参加による合同調査をケニアで行い、調査課題と手法を洗練させる。フェーズでは2年間をかけて各調査地点で人類学的なフィールドワークを実施し、また結果を国内における研究会で検討する。フェーズでは国内研究会での議論を深化させ、成果公開の準備を行う。

4. 研究成果

本研究課題は日本のアフリカ研究者による初めての高齢者研究であり、かつ、人類学と公衆衛生学・保健学を組み合わせた方法論を採用したため、期間を通じてそのアプローチのあり方について模索を続けた。このような事情と予算の制約により、当初の計画にあったケニアでのHDSSを用いた合同調査、および提言書の作成を実現することができなかった。

他方で、いくつかの点において成果を生み出すことができた。主な成果は以下の諸項目である。

- (1) ケニア・クワレ県における国際ワークショップの開催(2014年3月): 本研究プロジェクトメンバーのほか、外部参加者、現地の公的保健セクター関係者による30名ほどのワークショップを開催し、ケニアにおける高齢者の健康や生活の状況、日本の高齢者政策などについて意見を交わした。
- (2) 国際老年学・老年医学会第2回アフリカ地域会議に増田と宮地が出席した。サブサハラアフリカにおいて高齢者政策の策定に携わる担当者たちの会合に参加することで、本研究課題における政策面の最前線に関する知見を得た。
- (3) 日本アフリカ学会第52回学術大会におけるフォーラム「アフリカの人口高齢化:健康・生活・ケアの現在と未来」の開催: 学会参加者のなかから60名ほどの聴衆を得ることができた。メンバーである増田、波佐間、山本のほか、協力者として野口真理子(京都大)、林玲子(国立社会保障・人口問題研究所)が研究発表を行った。
- (4) 上記フォーラムにおける発表に基づき、日本アフリカ学会の『アフリカ研究』90号に、「アフリカの人口高齢化:健康・生活・ケアの現在と未来」と題する特集を掲載した。増田、波佐間、山本のほか、協力者である野口真理子の論考「エチオピア南西部有の農村における高齢者の生活を支える社会関係」および林玲子の論考「障害率からみたサブサハラアフリカの人口高齢化」が掲載された。
- (5) 研究分担者である田川が代表を務める基盤研究B「グローバル化するアフリカにおける 老いの力 の生成と変容」(課題番号:24401041)との協働により、編著

『アフリカの老人:老いの制度と力をめぐる民族誌』(九州大学出版会、2016年)を刊行した。

上記のような成果の作成と実施、および数度にわたる国内での研究会の開催を通じて、本研究において検討された論点は多岐にわたる。本研究課題はこれまで未着手であったアフリカの未来の高齢化を扱っているために、必然的に論点の発見・抽出とその整理が重要な作業となった。そのうちのいくつかはすでに公刊された書籍・論文あるいは学会発表において指摘されているが、いずれも今後のさらなる調査と検討を要するものである。以下に、今後の探求課題となる事項を4点挙げる。

(1) 都市貧困層の増加

この点については山本がザンビアで、増田と野口がエチオピアでそれぞれ調査に着手している。アフリカ諸国家では、とくに首都において貧困増の人口が増加しており、一部がスラムを形成している。こうした、都市部への新規流入者のみならず、移住からすでに数十年が経過した高齢者層のなかに貧困高齢者や独居高齢者が多くいることが明らかとなってきた。

この知見は、①都市部貧困層全般の生活基盤の改善、②ファミリーケアに期待できない独居高齢者に対する公助と共助の基盤整備の必要性、という2つの課題を提起する。

(2) 農耕民と牧畜民のコミュニティの輪郭

本研究課題に参画する人類学者の全員がこれまでの研究実績を農耕民や牧畜民といった生業社会において蓄積してきたことから、地域社会における生業経済と居住形態が、高齢者に対する生活ケアにおよぼす構造的な問題が重要な検討課題として浮上した。

従来の保健介入において一般に「コミュニティ」としてくられる地域社会は、農耕民や都市住民を暗黙の前提としてきた。他方で、定住性の弱い牧畜民社会における「コミュニティ的なもの」のイメージはとらえにくいものとされてきた傾向がある。

本課題における検討を通して見えてきたのは、むしろ、牧畜社会におけるコミュニティの輪郭の明瞭さと、農耕社会におけるコミュニティ基盤の弱さ(単位世帯の独立性の強さ)である。この「コミュニティの輪郭」という課題は、共助領域における高齢者ケアの社会基盤のあり方に直結する論点を提起するため、今後の重要な探求課題となり得る。

(3) 社会福祉政策と三助(公助・共助・自助)

本研究課題の重要な検討事項の一つが、東アフリカ諸国における社会福祉、社会保障といった公助領域の制度整備の確認である。代表者である増田はケニア保健省や関連諸機

関、エチオピアの NGO などにおけるインタビュー調査を通じて、これらの政策課題の進捗と取り組み状況を確認してきた。

いわゆる三助（公助・共助・自助）がオーバーラップする領域において、保健や社会保障が重要な役割を担う公助領域の制度整備は不可欠であるが、アフリカにおいては南アフリカ共和国などわずかな例を除いて、高齢者福祉政策の実施にはいたっていない。他方で、複数の国家において持続性や実現可能性を念頭においた制度設計に着手していることも事実であるが、年金や医療保障といった点においては検討課題が山積している。また政策策定のためのエビデンスとなるサーベイランスもほとんど実施されていない。

既述のような、都市貧困層高齢者の増加といった問題を考慮すると、現時点では「三助の隙間」に陥ってしまった人々のケアは、民間セクター（NGO）などに依存せざるを得ないのが実情である。

(4) 神話の解体

検討を進めるなかで、アフリカの高齢者に関する複数の神話をどのように解体すべきかということが重要な論点として浮上した。具体的には、①アフリカでは家族が高齢者の世話をするのが規範であるという「ファミリーケア神話」、②高齢者は脆弱な存在であるとする「弱き高齢者神話」、③アフリカでは高齢者には権威があり尊敬を集めているとする「強き高齢者神話」の3つである。

前の2点は高齢者福祉や老年学において流通しているものであり、3点目は人類学的な記述によって流布する高齢者像である。

我々の調査によって、ファミリーケアがアフリカ地域社会において重要であることは確認されているが、すでに都市部においてファミリーケアが機能しない場面が多く出現していること、また、ファミリーケアを重要視するあまり高齢者ケアが自助領域に閉じ込められてしまう危険性が指摘されている。「弱き高齢者」や「強き高齢者」のイメージについても同様であり、地域社会の脈絡に即した高齢者の社会的布置を、民族誌的に精緻に記述する必要性が確認された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 14 件)

Tagawa, G. "The Logic of a Generation-Set System and Age-Set System: Reconsidering the Structural Problem of the Gadaa System of the Borana-Oromo", *Nilo-Ethiopian Studies* 22、査読有、2017年、pp.15-25

増田研「アフリカの人口高齢化：西暦2100年を見据えた調査と政策策定へ向けて」『アフリカ研究』90、査読有、2016年、pp.37-46

波佐間逸博「ウガンダ北東部の牧畜民ドラス社会における生と死をめぐる高齢女性の役割」『アフリカ研究』90、査読有、2016年、pp.59-70

HAZAMA, I., "Violence and Medical Pluralism among the Karimojong and the Dodoth in Northeastern Uganda", *African Study Monographs, Supplementary Issue* 53、査読有、2016年、pp.69-84

山本秀樹「特集「震災後社会と公民館」：震災後社会論」『日本公民館学年報』13(1)、査読無、2016年、pp.6-15

山本秀樹「高齢都市居住者を支える「共助」の仕組み作りとその課題：ザンビア共和国ルサカ市における住民団体（CBO）の事例から」『アフリカ研究』90、査読有、2016年、pp.85-92

増田研「アフリカに高齢化の時代が忍び寄る」『JANES ニュースレター』22、査読無、2015年、pp.8-15

YAMAMOTO, H., "Education for Sustainable Development -Community Learning Centers as the Platform for the Community Based Disaster Preparedness", *International Affairs and Global Strategy* 39、査読有、2015年、pp.32-36

山本秀樹「課題研究「震災後社会における公民館の役割」記録とまとめ」『日本公民館学会年報』12、査読無、2015年、pp.114-115

MOGES, Abu G., TAMIYA, N., YAMAMOTO, H., "Emerging Population Ageing Challenges in Africa: A Case of Ethiopia", *Journal of International Health*, 29(1)、査読有、2014年、pp.11-15

MIYACHI, K., "Cultural Transformation: Sociocultural Aspects of Female Circumcision among the Gusii People in Kenya", *Journal of Nile- Ethiopia Studies*, vol. 19、査読有、2014年、pp.1-15

山本秀樹「健康福祉問題等人々の生活向上の課題と公民館事業の可能性：公衆衛生・地域医療等の国際的動向と実践にかかわって」『日本公民館学会誌』10、査読無、2013年、pp.68-76

CHEN, L., TAMIYA, N., KATO, G., YAMAOKA, Y., ITO, T., MATSUZAWA, A., and YAMAMOTO, H., "Predictors of volunteerism: A study of older adults in Japan", *Journal of Public Policy and Administration Research* 3(6)、査読有、2013年、pp.71-79

波佐間逸博「東アフリカ牧畜社会におけるヘルスケア：ローカリティにもとづく医療支援に向けて」『アフリカ研究』83、査読有、2013年、pp.17-27

〔学会発表〕(計 23 件)

増田研「エチオピアにおける高齢者支援 NGO に関する予備調査：自助・共助・公

助の隙間で」(A Preliminary Study of Ethiopian NGOs for elderly support: An expected role of filling a gap in self-help, mutual and public aid)、日本国際保健医療学会第35回西日本大会、2017年3月4日、於：神戸大学(兵庫県神戸市)(ポスター発表・査読有)

宮地歌織「女性と高齢化：アフリカ・ケニアの事例から」、佐賀大学ジェンダーイコオリティフォーラム、2017年1月20日、佐賀大学(佐賀県佐賀市)(口頭発表・査読無)

MIYACHI, K., "Aging in Africa: The Life of Elderly Women in Rural Kenya," African Potentials project (2nd Phase): Comprehensive Area Studies 'African Potentials' to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues, 2016年12月11日、Grand Global Hotel(ウガンダ、カンパラ)(口頭発表、査読無)

宮地歌織「ケニアにおける女性高齢者の現状について」、第31回日本国際保健医療学会自由集会「グローバルエイジングへの国境なき挑戦」、2016年12月4日、久留米シティプラザ(福岡県久留米市)(口頭発表・査読無)

野村亜由美・後藤健介・山本秀樹・池田光穂・二田水彩・増田研「津波被災後の高齢者の外傷後成長と認知症に関する学際的研究?老いの成熟を目指して」2016(平成28)年度海外学術フォーラム、海外学術調査フェスタ、2016年7月9日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都府中市)(ポスター発表・査読無)

増田研「国家の関与はどこまで可能か? : 東アフリカにおける高齢者社会保障の試みをめぐって」第30回日本国際保健医療学会学術大会自由集会「グローバルエイジングへの国境なき挑戦」、2015年11月22日、金沢大学(石川県金沢市)(口頭発表・査読無)

HAZAMA, I., "Aging among Pastoralist Women: The Sharing of Bodies and Memories among the Dodoth in Northeastern Uganda", One Health Conference in Nagasaki, 2015年11月6-7日、長崎大学医学部良順会館(長崎県長崎市)(ポスター発表・査読有)

MASUDA, K., YAMAMOTO, H., TAGAWA, G., MIYAMOTO, S., HAZAMA, I., MIYACHI, K., NOGUCHI, H., NOGUCHI, M., and HAYASHI, R. "Elderly Life and Care in East Africa: Research Perspectives from Public Health and Ethnography", One Health Conference in Nagasaki, Ryojun Auditorium, Nagasaki University, 6-7 November, 2015 (ポスター発表・査読有)

MIYAMOTO, S., OKUMIYA, K., MASUDA, and Highland Civilizations Project Members

(2005-2013), "Comparative Study of Aging, Disease and Health in the Himalaya-Tibet and Africa Region", One Health Conference in Nagasaki, 2015年11月6-7日、長崎大学(長崎県長崎市)(ポスター発表・査読有)

池田光穂、西川勝、野村亜由美「心的外傷後成長における認知症コミュニケーションの可能性」、日本ヘルソコミュニケーション学会第7回学術集会、2015年9月5日、西南学院大学(福岡県早良区)(口頭発表・査読有)

TAGAWA, G., "Women's Sexuality in the Patriarchy of the Borana-Oromo", 19th International Conference of Ethiopian Studies, 2015年8月26日、ワルシャワ大学(ポーランド、ワルシャワ)(口頭発表・査読有)

増田研「アフリカの人口高齢化：健康・生活・ケアの現在と未来」(フォーラム「アフリカの人口高齢化：健康・生活・ケアの現在と未来」)、日本アフリカ学会第52回学術大会、2015年5月24日、犬山国際観光センター・フロイデ(愛知県犬山市)(口頭発表・査読有)

波佐間逸博「ウガンダ北東部の牧畜民ドドス社会の高齢者：生と死をめぐる高齢女性の役割に注目して」(フォーラム「アフリカの人口高齢化：健康・生活・ケアの現在と未来」)、日本アフリカ学会第52回学術大会、2015年5月24日、犬山国際観光センター・フロイデ(愛知県犬山市)(口頭発表・査読有)

MASUDA, K. and KAMIMURA, Chiharu, "The impact of the politico-culturally derived definitions of "Harmful Traditional Practices" for Health Promotion in Ethiopia", ITM Colloquium 2014 "The Human Factor: Social Sciences in Global Health Research", 2014年11月24日~27日、Institute of Tropical Medicine, Antwerp(ベルギー・アントワープ)(ポスター発表・査読有)

野口真理子「エチオピア西南部における高齢者をとりまくケア・ネットワークの重層性」、第55回日本熱帯医学会大会・第29回日本国際保健医療学会学術大会合同大会、2014年11月2日、独立行政法人国立国際医療研究センター(東京都新宿区)(ポスター発表・査読有)

MASUDA, K., "Population Aging in Africa: Exploring Multi-Social System Environment in Political, Economic and Cultural Landscape", The Second International Conference "Challenges of Global Aging Across Borders and Academic Fields" Center for Global Aging, Tsukuba, 2014年9月29日、筑波大学(茨城県つくば市)(口頭発表・査読有)

増田研「アフリカにおける「早すぎる高齢化」とケアの多様性をめぐる学際的研究」、海外学術調査フェスタ2014、2014年6月28日、東京外国語大学アジア・アフリカ

言語文化研究所(東京都府中市)(ポスター発表・査読無)

波佐間逸博「暴力に抵抗する医療—ウガンダ北東部カラモジャにおけるカリモジョンとドドスの事例から」、日本アフリカ学会第51回学術大会、2014年5月25日、京都大学(京都府京都市)(口頭発表・査読有)

野口真理子「エチオピア西南部における高齢者の居住状況の実際:生業活動における社会関係の変遷」、日本アフリカ学会第51回学術大会、2014年5月25日京都大学百年時計台記念館(京都府京都市)(ポスター発表・査読有)

野口真理子「エチオピア農村に暮らす高齢者の居住形態と社会関係」日本ナイル・エチオピア学会第23回学術大会、2014年4月20日、広島市まちづくり市民交流プラザ(広島県広島市)(口頭発表・査読有)

②1増田研「アフリカに高齢化の時代が忍び寄る」、日本ナイル・エチオピア学会第23回学術大会、2014年4月19日、広島市まちづくり市民交流プラザ(広島県広島市)(口頭発表・招待講演)

②2田川玄「アフリカから<老いの力>を学ぶにあたって」、日本ナイル・エチオピア学会第23回学術大会、2014年4月19日、広島市まちづくり市民交流プラザ(広島県広島市)(口頭発表・招待講演)

②3増田研「アフリカにおける未来の高齢化に対する Qual+Quant アプローチ:デザインと展望」第28回日本国際保健医療学会学術大会自由集会「グローバルエイジングへの国境なき挑戦」、2013年11月3日、名城大学(沖縄県名護市)(口頭発表・査読無)

〔図書〕(計 2 件)

①田川玄、慶田勝彦、花淵馨也、深澤秀夫、阿部年晴、中村香子、椎野若菜、増田研、亀井哲也、野口真理子『アフリカの老人:老いの制度と力をめぐる民族誌』九州大学出版会、2016年(総ページ数:246ページ)

②増田研、椎野若菜、梶丸岳、奥山雄大、佐藤靖明、大塚行誠、國木田大、舘山一孝、野上建紀、塚原高広、駒澤大佐、坂本麻衣子『フィールドの見方』古今書院、2015年(総ページ数:214ページ)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

増田 研(MASUDA, Ken)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号:20311251

(2)研究分担者

波佐間 逸博(HAZAMA, Itsuhiro)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号:20547997

山本 秀樹(YAMAMOTO, Hideki)

帝京大学・公衆衛生大学院・教授

研究者番号:50243457

野村 亜由美(NOMURA, Ayumi)

首都大学東京・健康福祉学部・准教授

研究者番号:50346938

宮本 真二(MIYAMOTO, Shinji)

岡山理科大学・生物地球学部・准教授

研究者番号:60359271

田川 玄(TAGAWA, Gen)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号:70364106

宮地 歌織(MIYACHI, Kaori)

佐賀大学・男女共同参画推進室・助教

研究者番号:40547999

(3)連携研究者

田宮 奈菜子(TAMIYA, Nanako)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号:20236748

佐藤 廉也(SATO, Ren'ya)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号:20293938

(4)研究協力者

野口 真理子(NOGUCHI, Mariko)

京都大学・アフリカ地位研究資料センター・特任研究員

研究者番号:20783921

林 玲子(HAYASHI, Reiko)

国立社会保障・人口問題研究所・国際関係部・部長

研究者番号:70642446